F-10

観光地の商店街における歩行者の行動に関する研究
～熱海市熱海銀座商店街を対象として～
A study on pedestrian shop-around behaviors in a shopping street located in a tourist spot
~A case of Atami Ginza Shopping Street, Atami City~

○伊藤拓也[1]，　井上富貴[1]，　根上彰夫[2]，　赤澤加奈子[2]
*Takuya Ito[1], Yutaka Inoue[1], Akio Negami[2], Kanako Akazawa[2]

We study on pedestrian behaviors in Atami Ginza Shopping Street which is located in Atami City, which is one of most famous resorts in Japan and best known for hot spring. In Atami Ginza Shopping Street, there are about 50 shops including good old showa-ish shops and new fashionable coffee shops. The aim of this survey is to obtain knowledges of pedestrian behaviors in a shopping street by verifying and evaluating by means of a follow-up survey and a questionnaire survey in Atami Ginza shopping street located in the center of this area. As a result, half of pedestrian stop by one shop at least. The other half of pedestrian pass through the shopping street. According to these results, we can see that the street is most likely recognized as a path from one place to another.

1.　はじめに
1ー1.研究の背景・目的

近年の日本の商店街において、空き店舗の増加、商店の減少、後継者問題など多くの課題が挙げられている。その原因の背景としては、少子高齢化や郊外大型店の進出などとされているが、商店街の活性化を実現していく為に、各商店街の現況を踏まえた上で適切な対応を取る必要がある。その中で、商店街内の歩行者回遊行動の調査は、商店街の現況を認識する上で重要な役割を担うと考えられる。竹内ら[1)]、宮本ら[2)]、三宅ら[3)]などが既往研究として挙げられるが、観光地の商店街を対象とする研究は少なく、観光地の中心市街地の商店街の活性化が望まれる。そのため本研究では日本を代表する観光地である熱海を対象とし、市街地の中心に位置する熱海銀座商店街において追跡調査を用いて、商店街における歩行者の行動の実態を得ることを目的とする。

1ー2.研究の対象地

本研究は、熱海市に位置する銀座商店街(図1)を対象とする。熱海の観光客と地元住民の買い物どころとして長年栄えてきた商店街であり、熱海の名産品である干物専門店や和菓子屋など、50店舗程の商店が揃っている。

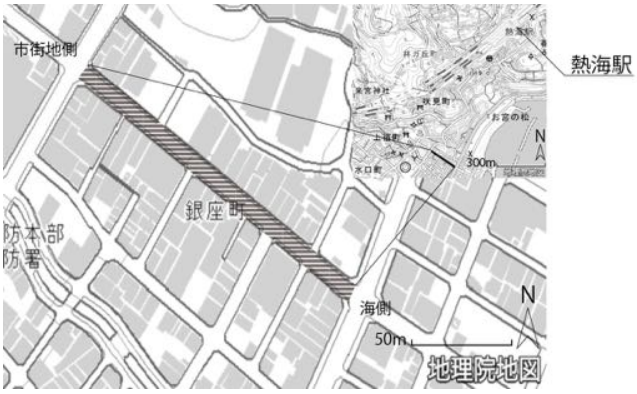

図１　研究対象の商店街

2.　研究方法
2ー1.追跡調査の方法

(1)調査方法
商店街の歩行者行動を追跡調査から分析することで、歩行者回遊行動の特徴を抽出する。

(2)調査実施日
2019年08月25日(日)に実施。商店街の開店時間を考慮し、時間帯を12:00～15:00に決定した。

(3)調査対象範囲
本研究は静岡県熱海市にある本町通りと国道135号を結ぶ、銀座商店街を調査対象とする。

(4)追跡調査開始地点
本町通りと銀座商店街の交差点、国道135号と銀座商店街との交差点の二箇所。それぞれ15組ずつ追跡調査を実施。

(5)追跡方法
・二箇所の追跡開始地点を通り過ぎた歩行者から追跡し始める。その際、歩行者は単身かグループかは関係しない。
・追跡終了の条件は以下とする
①店舗に入り5分以上滞在した場合(店舗とは外部に対して独立した出入り口を持つものとする。つまり、同じ建物内であっても外部に対して独立した出入り口を持つものは異なる店舗として扱う。)
②店頭で商品を見て5分以上立ち止まる。(店頭に「あふれだし」の見られる店舗のみ)
③調査範囲から出る。
④歩行者が自転車や交通機関を利用する。
⑤利用目的とされる店舗の待ち列に5分以上並ぶ。
・追跡再開時における追跡者の選定は、追跡開始時点に戻り、その地点を通り過ぎる人を対象とする。

3.　調査結果
3ー1.店舗利用の割合

追跡調査を実施した30組の歩行者の内、店舗に1回も立ち寄った歩行者が15組、どこも立ち寄らず素通りした歩行者が15組という結果になった。また2箇所

1：日大理工・学部・建築　2：日大理工・教員・建築

の追跡開始地点について比較すると、店舗に1回でも立寄った15組の内、市街地側からの歩行者が約54%、海側からの歩行者が約46%という結果が得られた。本来店舗間の移動が比較的多いとされる商店街において、50%もの歩行者が素通りをしている実態を把握することができた。

3ー2.店舗間移動の割合・店舗構成の内訳

本研究における店舗間移動とは2店舗以上の店舗に立ち寄ることを示し、1回でも店舗に立ち寄った15組の内、3組(全体の10%)のみ店舗間移動をするという結果が得られた。これらより銀座商店街での店舗間移動は少ないことがわかる。また商店街の店舗構成を図2に示した。業種の内訳を図3に示す。また図3より飲食業(24.0%)・小売業(19.0%)・土産品店(11.0%)が商店街内店舗の50%以上を占めている。また近年では観光客向けのゲストハウスや、若年層向けの商品などが増えており、店舗構成の変化は大きい傾向にあると予測できる。

3ー3.利用店舗の内訳

一回のみ店舗に立ち寄った歩行者における、利用店舗の内訳を図4に示す。図からわかるように、飲食店と小売店の利用が全体の約9割を占めている。6組の歩行者が飲食店の利用をしており、近年観光客への取り組みが進み、空き家のリノベーションによる飲食店の増加や、追跡調査を実施した時間帯が昼時だったことなどが理由として挙げられる。また小売店利用者の5組の内、4組が「atami purin second」の利用だった。ネットやSNSでも話題となっている事もあり、若年層から家族連れの利用が多く、調査時間の際はおおよそ20組ほどが常に列をつくっていた。

図2　商店街の店舗構成

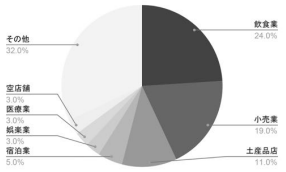

図3　商店街店舗構成の内訳

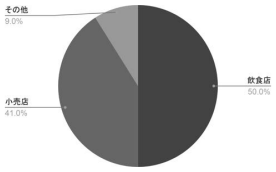

図4　利用店舗の内訳

3ー4.店舗間移動の内訳

店舗間移動をした3組の店舗の内訳を表1に示す。市街地側からの歩行者が2組、海側からの歩行者が1組となり、1回でも店舗に立ち寄った歩行者においても市街地側の通行人の方が割合が高い。これより市街地側からの来街者の方が店舗を利用する場合が多い傾向にあると考えられる。また、店舗間移動した歩行者の内、75%が女性であることから女性の方が店舗を利用する確率が高いと予測される。

表1　店舗間移動の内訳

	性別・人数	年代	回遊の流れ
1	女性1人	60~70代	洋服屋→土産屋
2	男性:1人 女性:1人	30~40代	商売店→土産屋
3	女性:2人	30~40代	飲食店→飲食店→熱海プリン

4.　まとめと展望

以上より、銀座商店街の来街者は店舗に立ち寄る場合が決して高いとはいえず、さらに店舗間移動の割合は低い傾向にあると考えられる。銀座商店街はそれぞれの歩行者の目的地への通り道として認識されている可能性が高いと考えられる。

今後の展開に関して、商店街における回遊行動の特徴をより明確化するためには、追跡調査のデータの母数をより増やし結果の信憑性を高めていく必要がある。それに対し、回遊行動性が低い問題の原因を抽出することを目的とし、素通りした歩行者へのアンケートを実施していく必要があると考えられる。これらを通して商店街の構成要素と歩行者の回遊行動の因果関係を明らかにしていくことが課題である。

5.　参考文献

1)竹内昌史、吉田琢美、鎌田敏之：「回遊行動からみた商店街複合地区の動態分析」、日本建築学会計画系論文集、第76巻、第660号、2011年2月
2)宮本佳和、湯沢昭：土地利用変化からみた中心市街地の将来予測と回遊行動の現状把握」、日本都市計画学会、都市計画論文集、No39-3、2004年10月
3)三宅直、松村暢彦：「来街者行動からみた商店街店舗間構造に関する研究」土木学会論文集D3、Vol68、No5、I_445-I_452、2012年